１７歳の誕生日まで、何不自由なく暮らしてきた少女ディル。
しかし、その平和を、化物(モンスター)の大軍が蹂躙した！
「竜の娘(ディラジーナ)」の名と引き換えに全てを失ったディルは、壊滅した村を旅立ち、ここ、エンドールへとやってきたのだ。

エンドールの街で出会った占い師(フォーチュンテラー)ミネア。彼女は、涙を流し、ディルに言うのだった。

「私たちは、あなたに逢うために、この街まで来たのよ‥‥＜勇者＞ディル」

ドラゴンクエスト４移植記念二次創作小説

「私の中の炎」

～エニックス「ドラゴンクエスト４・導かれし者たち」第５章より～

第２話　「『自分だけのもの』を」

あさづけ兄貴

「さて‥‥こうなったら、占いなんてしている場合じゃないわね」
ミネアは、置いてあったハンカチで涙をぬぐうと、占い道具を片づけ始めた。

「あれ‥‥やめちゃうんですか？」
ディルの素朴な問いに、ミネアは微笑みつつ、しかしディルの方は見ずに、片づけを続けながら、答えた。
「今日は店じまい。そして、今日で、この店は店じまい」
「えっ？」
「この店を開いていたのは、あなたを見つけるためだったから。ちょっと名残り惜しいけど‥‥あなたに逢えた以上、急がなければならないわ」
水晶玉を、クッションを、燭台を‥‥袋に詰めてゆく。
「できれば、明日にでもここを旅立とうと思っているのだけど‥‥その前に、あなたに会って欲しい人がいるのよ、ディル」
「会って欲しい人？」
「そう。私と同じ、あなたに導かれた者のひとり。この旅に必要不可欠な存在‥‥

私の知る限り、世界最強の炎術士（ファイア・ソーサレス）」
「炎（ファイア）‥‥術士（ソーサレス）‥‥」

テーブルにかけておいた布まで、すっかり袋に詰め終わったミネアは、ここで初めて、顔を上げて言った。

「私の姉よ」

＊

「＜炎術士（ファイア・ソーサラー）＞ってのは‥‥要するに、炎の魔法使いのこと。姉は女性だから＜ソーサレス＞ね」

宿屋へ戻る道すがら、ミネアはディルに、「魔法」について話していた。

「人が使える＜魔法＞‥‥つまり唱えられる呪文は、その人の持っている能力や素質に左右される‥‥これは、分かるわね」
「はい」
「でも、たとえどんなに素質があっても、人が人である限り、絶対にひとりでは扱い切れない呪文があるの」

ミネアの講釈を、ディルはこくこくとうなずきながら聞いて置いた。

「例えば、炎の呪文と氷の呪文。これを両方ともひとりで使いこなすことは、絶対にできないの。相反する力だから‥‥片方の呪文に精通すればするほど、もう片方の呪文には弱くなってゆくのよ」
「へぇ‥‥」
「だから、私の姉なんかは、きっと、氷の呪文は絶対に覚えられない。ヒャド一発だって至難の業のはずよ。ふふ」
「じゃあ、例えば、氷の呪文が得意な人は、逆に炎の呪文を使えなくなっちゃうんですか？」
「御名答。だから、この世で一番の凍術士（フリーザー）‥‥昔、サントハイムに『凍嵐の魔人』って呼ばれたものすごい凍術士（フリーザー）がいたんだけど、まだ生きていれば彼ね‥‥そう、彼なんか、メラの一発も撃てないはずよ、多分」

歩きながら話すミネアが、ディルには、本当に知的に見えた。

「もうひとつ、そうねぇ‥‥例えば、回復呪文のホイミやベホイミなんかと、炎や
　氷のような攻撃の呪文も相性が悪いわね」
「あ、私‥‥メラとベホイミ使えますけど」

「え？」
ミネアが本当に目を丸くして驚いたので、逆にディルの方がびっくりしてしまった。
「お爺ちゃんが教えてくれたんです。必要だから、って。それで必死に練習したら‥‥」
「できるようになっちゃったのね」
「はい」
それがどれだけ「異常」なことか、ということにはまったく気づかない様子で、ディルは答えた。

「‥‥それは、本当に凄いことなのよ」
苦笑しながら、ミネアが答えた。
別に、怒ったり、機嫌を損ねたりしたわけではない。その力‥‥通常の人間が持ちえないその力に圧倒された、というのが本当のところだ。

「そう‥‥なのかなぁ‥‥」
自分の両方の掌を見ながら、ディルは呟いていた。

＊

「着いたわ」
エンドールで一番大きな宿屋の前で、ミネアは立ち止まった。

ミネアは、勝手知ったる様子で、扉を開けて宿屋に入る。その後を、ディルが、おっかなびっくりと言った様子で、ついていった。

「おや、お帰りなさい」
宿屋の主人が、愛想良くミネアに声をかける。
すでに顔なじみといった風情だ。この様子だと、かなり長期間、ミネアはこの宿に逗留していたのであろう。

「‥‥おや、そこのお嬢さんは？」
「新しい連れです」
ミネアの紹介に、ディルが、ぴょこんと頭を下げた。
「はい、こんにちは」
主人も、笑顔で答えた。

「姉は？」
「ああ、マーニャさんなら、先程出ていかれましたけど」

一瞬。
ミネアの顔に、縦線が走った。
自分の右手で、額をぺちっと叩く。
「間に合わなかったわ‥‥そうよね、もう日が暮れていたものね‥‥」

「‥‥？」
不思議そうなディルに、ミネアは言った。
「予定変更。姉さんを迎えに行くわ」
「迎えに‥‥？」
ディルが聞き返す。
「でも、お姉さんがどこに行ったか分からないんじゃ‥‥」
「この時間に、姉さんが出かけそうなところといったらただひとつ。日没と同時に
　オープンする場所‥‥」
ミネアは、真剣そのものの面持ちで言った。
「カジノよ」

＊

ギイイイイ‥‥。
入り口の扉を開ける。

ここは、エンドール最大の酒場。
日没と同時にオープンするこの店は、今がちょうど混雑のピークであった。
一日の仕事を終えた人々が、麦酒（エール）をあおり、焼いた肉をかじりながら、世間話に花を咲かせている。
人々が社会生活を営む上で、欠かせないリフレッシュスペース。それが酒場である。
それは、我々の世界でも、このエンドールでも、変わらぬ事実であった。

だが‥‥
それを、１７歳のディルが理解するのには、まだ時間がかかりそうであった‥‥。

「ミネアさん‥‥」
「なぁに？」
「ここ‥‥空気悪いですね」

なにか不満げな顔で、ディルは言った。
ディルにとって、酒場に入るのは初めての体験であった。だから彼女は、酒場という空間が、アルコールの蒸気と煙草の煙に満ちた空間だということを知らなかったのである。

「酒場というのは、そういうものなのよ」
ミネアが、笑顔で答える。

「えーと‥‥」
ミネアは、周囲をきょろきょろと見回した。そして、どうやら、目的のものを見つけたらしかった。
「‥‥ほら、あそこの階段。あの地下がカジノになっているの」
ミネアが指差す先には、派手な色で、

↓Welcome to THE CASINO!!↓

と書かれた看板が立っていた。
そして、その足元から、地下に降りる階段が続いていた。
階段の下から漏れる七色の光。それは明らかに、この階段の下に「何か」があることを雄弁に物語っていた。

「行くわよ」
「は、はい」

ミネアとディルは、先を急ぐように、階段を降りていった‥‥。

＊

「うわぁ‥‥」
思わずディルが声を上げた。

地下は、上階の空気の淀んだ酒場とはまったく違った空間だった。

おとぎの国、というものが実在するとしたら、それはこういう空間に違いない、とディルは思った。
きらびやかな内装。
店内には、陽気なホンキートンクピアノの音色が流れる。
店員さんなのだろうか、美人の女性が、うさぎの耳に黒のレオタード、網タイツ姿で歩き回っていた。

「なんだか‥‥すごいところですね」
ミネアに話しかけるディル。しかし、ミネアはそれには答えず、先ほどと同じように、ただ店内をきょろきょろと見回していたが、やがて‥‥

「！」

彼女は一瞬目を細めると、奥のスロットマシンのコーナーに向かって、つかつかつかっ、と早足で歩きだした。

「あっ、ちょ、ちょっと！」
慌ててディルが後を追う。

「ミネアさん？」
「いたわ」
「えっ？」

ディルは、ミネアの視線を追って‥‥それが、スロットマシンをプレイしている、一人の人影に注がれていることに気づいた。

女性のようだった。

薄紫色（ペールパープル）のロングヘア‥‥褐色の肌。
後ろ姿だけであったが、ミネアと瓜二つだった。

ただ、ひとつ、大きく異なっているものがあった。
それは服装だった。
その女性は、非常に露出度の高い格好をしていたのである。

背中には、胸当て(ブレスト)を止めていると思われる紐が一本だけ。
下半身も、短い下履き(スコート)を履いているだけだった。
正直、少々目のやり場に困る格好であったと言わざるをえない。

その女性が、スロットマシーンを両手で抱え込むようにして、ゆさゆさと揺さぶりつつ、悪態を垂れていたのである。

「ちょっとっ、どーして出ないのよっ！ もうひとつだけドラムがずれれば、大当たりだったのにっっ！」

ミネアは、心底呆れ顔で、一回だけ「ふぅ‥‥」と溜め息をつくと、その女性にすっと近寄り、ちょんちょん、と、右肩の辺りをつついた。

「ちょっと待ってよ、今忙しいんだからっ！ もう少しで大当たりが来るのよっ！」

どうやら、彼女は、閉店が近いことを店員が知らせに来たのだと勘違いしているらしい。

ちょんちょん。
もう一度、肩をつつく。

「もう少し待ってってば！　‥‥だから、あと一転がり！一転がりなんだって！」

ミネアは、もう一度溜め息をつくと、肩をつつきつつ、今度は声に出して、言った。

「ねえさん」

地獄の底から聞こえてくるような声だった。

「待ってって言ってるでしょ！　うっさいわねっ！‥‥」
その女性は、そう怒鳴りかけて、そのまま、固まった。
「‥‥『ねえさん』？」

冷や汗が流れ落ちる。

「って‥‥その声は‥‥」

キリキリキリ‥‥という、ゼンマイの巻く音が聞こえそうな動きで、ゆっくりと彼女は振り向いた。

彼女の目に入ったのは、自分の妹の姿だった。
顔には、いつも通りの穏やかな微笑みを。そして、こめかみに、その微笑みに似合わない、青筋を浮かべていた。

まずい。
彼女は直感した。なんとかこの場を取り繕わないと。

「あ、あら、ミネアじゃない。奇遇ね〜、ほほ、ほほほほほほ‥‥」
口に手を当てて、ひきつった顔で笑う。しかし‥‥

「『ほほほほほ』じゃありませんっ！」

ミネアが彼女を一喝した！
腰に両手を当て、上体を突き出し、ミネアはさらに彼女を詰問した。
「一人でカジノに行っちゃいけないって、あれ程言ったでしょうっ！」
「だぁってぇ〜、スロットマシンがあたしを呼ぶ声が‥‥」
と、両手の人差し指を突き合わせながら拗ねるふりをする彼女だったが‥‥

その時、彼女はふと、妹の影にかくれて、見慣れぬ少女が、彼女を呆れ顔でじっと見ていることに気がついた。
一瞬で、真剣な目つきに戻る。
「この子は？」

「そうそう、説教している場合じゃなかったわね‥‥」
ミネアは、もう一度軽く溜め息をつくと、もう一度彼女のほうに向き直り、言った。
「やっと‥‥見つけたわ」
「じゃあ、この子が？」

こくっ。
ミネアが、ほんの少し微笑みの混ざった真剣な面持ちで、うなずく。

「そっか‥‥よかった‥‥よくやったよ、ミネア」
彼女は、ミネアを見て微笑んだ。

少しだけ、涙が浮かんでいたことに、ミネアは気がつかなかった。

＊

「さて、それじゃ、ご挨拶ご挨拶、と‥‥こっちおいで」
彼女が、ミネアの影に隠れていた少女‥‥ディルに向かって、微笑みながら、手招きをした。

しかし、ディルは、彼女の方に前に進み出ようとしなかった。
目をそらす。

「ありゃあ‥‥嫌われちゃったかな」

彼女が、苦い表情で頭を掻く。ミネアも苦笑した。
「私の姉さんだってことは説明したんだけど、いきなり私に怒鳴られてる所を見せてしまったからね‥‥にわかには信用できないんじゃない？」
「自業自得か‥‥でも、嫌われたままなのもシャクだからね」

言うと、彼女は、ディルの方に近づいていった。
ディルの目の前で、ほんの少し腰をかがめ、目線を同じ高さにする。
二人の顔が、ぎりぎりまで接近する。

ほのかに、いい香りがした。

（うわ‥‥）
ディルの心臓が、どきっ、と一拍高鳴った。

綺麗な女性だ、とディルは思った。

ミネアも確かに綺麗だった。が、この女性は、ミネアと似ていて、それでいて、違った。
髪型は、前髪を下ろしている以外は、ミネアと同じ薄紫色（ペールパープル）のロングヘアに同じ冠（ティアラ）。背格好も、肌の色も、ミネアと良く似ていた。

しかし、何より決定的に、彼女とミネアでは、顔が違っていた。
どちらかというと、切れ長の瞳で、穏やかな表情をしたミネアと違い、たれ目がちのぱっちりとした瞳で、表情もコロコロと良く変わる。

快活な印象を与える顔立ちであった。

＊

ほんの少し、目線を落とす。
後ろから見て知っていたが、前から見ると、改めて、すごい格好だと思った。
ふたつの胸を隠す胸当て（ブレスト）の合間には、谷間がはっきりと見えていた。
履いている下履き（スコート）も、前から見ると、本当に短かった。

ディルの頬が、我知らず赤くなる。

まるで、下着のまま歩いているような格好（ファッション）であった。
それでいて、良く似合っていた。
極端に布の少ない服装が、ディルの目から見ても抜群の彼女のプロポーションを、余すところなく外界に伝えていたのだ。

そして、特筆すべきは、普通に考えればものすごく扇情的な格好であるにもかかわらず、彼女の服装は、決して余人に「いやらしい」印象を与えないのだ。
彼女のプロポーション、彼女の表情、彼女の性格‥‥恐らく、そのような様々なものが、この格好（ファッション）と、まさに奇跡的とも言えるバランスを保っているのだろう。

＊

視線を元に戻した。
綺麗な顔がそこにあった。
ミネアと同じ、澄んだ瞳をしていた。
引き込まれそうな瞳だった。

その瞳でディルを見つめ、彼女は言った。

「はじめまして。あたしはマーニャ‥‥コーミズのエドガンの娘、って言っても
　分かんないか‥‥聞いてると思うけど、そこのミネアのお姉さんさ」

にこっ。
マーニャは微笑んだ。
ミネアの穏やかな笑みとはまた違う、人懐っこい微笑み。

どきっ。
また、ディルの心臓が高鳴った。
ディルには、マーニャが、ディル自身がいまだ持ちえない、世間一般で言うところの「女性性」を余すところなく持っていると思えた。
今まで、自分にとって唯一の比較対象であったシンシアが持っていて、かつディルが持っていないもの、その全て、そしてそれ以上のものを、マーニャは持っていると思えた。
マーニャには、そのプロポーション、その美しさ、そして言葉の端々まで、自分の憧れているものが全て揃っていると思えた。

実は、現実はそうではなかった。
マーニャは「女性性」を余すところなく持っているわけではなかったのだ。
ディルは、マーニャが炊事・洗濯などの家事を大の苦手にしていることを知らなかった。マーニャには、シンシアが得意だったクッキーも焼けなかったし、マフラーも編めなかったのである。

そして、それとは逆に。
マーニャは、いまだディルの知らない、非常に重要なものを持っていた‥‥無論、この時のディルには決して知りえないことであったが。

‥‥それが何かは、この物語の中で明らかになるのである。

＊

ディルと零距離で向かい合ったまま、マーニャは言った。
「名前、何て言うんだっけ？」
「え？」
頬を染めたまま、ディルは我に返った。
「あ、えっと、ディルって言います」
「ディル、か‥‥」
マーニャは一瞬、ちょっと眉根にしわを寄せた。そしてまた、人懐っこく笑った。
「結構かわいいじゃん」
「えっ!?」
まったく予想外の一言に驚くディル。
「そんなに驚かなくても‥‥それとも、そんな事、言われたことない？」
「は‥‥はい‥‥」

「そっか‥‥でも、もしかしたら、それって少しは自分のせいかもよ」

「えっ？」
「えっ？」
ディルと、そしてミネアの驚く声。
それを気にせず、マーニャは顔をディルから離し、上体をピンと伸ばして‥‥
びしっ！
ディルを指差した。
「ずばーり！　磨き方が足りない！」

「磨き‥‥方？」
「そ」
マーニャが、したり顔で言う。
「いくら素材が良くっても、磨かなきゃ、その真の良さは伝わらなーい！」
「はぁ‥‥」

「と、いうわけで」
マーニャが、いたずらっぽく、にやり、と笑う。
「今夜は、このマーニャ姉さんがつきっきりで、その辺をしっかり叩き込んで
　あげましょう！　それが終わったら酒場で歓迎パーティだよ！」
「は、はぁ‥‥」
事態が飲み込めていないディルを尻目に、ひとり盛り上がるマーニャ。
「そうと決まれば善は急げ！　帰るよミネア！」
ディルの手を引き、階段に向かって走り出す。
「きゃあっ！」
「あ、ちょっと！　姉さん！」
ミネアの声も聞かず、マーニャは、ディルの手をつかんだまま、階段を駆け上がっていった‥‥。

＊

宿屋、マーニャとミネアの逗留する部屋。

「おじゃします」
辺りをきょろきょろ見回しながら、ディルがおずおずと、部屋に入る。
と、その途端！

バサッ！
「わぷっ!?」

ディルの顔面に、何かが投げつけられた！

「‥‥」
顔面から手に落ちたそれを、しげしげと見つめる。

「タオル‥‥？」

「そう。まずは、そこの洗面所で顔を洗ってらっしゃーい」
マーニャが澄まし顔で言う。

「あ、はい‥‥」

とたたたっ、と、タオルを手に、ディルが駆けて行く。
「念入りに洗うのよー」
と、遠くなる後ろ姿に、マーニャが声をかけた。

＊

「さて、と‥‥まずは、こんなもんね」
「‥‥姉さん」
不満そうな顔で、ミネアが言う。
「ん？」
「あまりにも強引なんじゃない？　初対面の子に向かって‥‥」
「そう思う？」
「当たり前よ！」
「ん〜‥‥」
マーニャは、頭をぽりぽりと掻いた。そして、真剣な眼差しで言った。
「あの子、今のままじゃ、危ないよ」

「えっ？」
「あんた、あの子の目、見たかい？」
「ええ‥‥でも、泣いてたから」
「泣きやんだ後さ。あの子の奥に、何が潜んでいるのか」

ミネアは、少し言い淀んで‥‥言った。
言いたくない‥‥というより、それを認めたくないようだった。
「‥‥見たわ。でも‥‥」
「多分、あんたの見た通りさ」
やりきれない、といった表情で、マーニャは続けた。
「同じじゃなかったかい？　あの頃のあたしたちと」

＊

ばしゃばしゃっ。
「ふぅ‥‥」

顔に塗った石鹸の泡を洗い流し、ディルは顔を上げた。
「‥‥」
洗面所の鏡に映った自分の顔を、じっと見つめる。
「磨き方が足りない‥‥か」
一言言って‥‥
にこり、と笑ってみた。

結構、かわいいような気がした。

そして、すぐ、真顔に戻る。
「私‥‥何やってんだろ」
そう呟くと、ディルは再び、石鹸を泡立て始めた‥‥。

＊

「‥‥ええ。同じだったわ‥‥表面では笑っていても、その底は‥‥何も信じられない、何も考えられない、そんな目。全てを拒絶するような‥‥」
ミネアが、つらそうな面持ちで言った。
「だろ？」
マーニャが相づちを打つ。
「何があったかは知らないけど‥‥いや、きっと何かあったんだ。でなければ、若い女の子が、あんな目にはならないよ。あの頃のあたしたちみたいな」
「‥‥」
ミネアは黙っている。

「それに、あの子は今、本当に何も考えてないよ。現に、初対面の女にむりやり宿屋に
　引っ張り込まれて、素直に顔洗ってるじゃない。こんなに理不尽な事言われたのにさ」
「言われた通りに、なにひとつ疑わずに行動している、って事？」
「そう。自動的って言ってもいいだろうね。頭が寝てる。自分で判断してないんだ」
「強度のショックによる解離性障害（ディソシエイション）、か‥‥」
「って言うのかい？　まぁ、あたしはその辺あんまり詳しくないけどさ」

人にアドバイスをする占い師（フォーチュンテラー）として、人格分析に長けたミネアの指摘に、マーニャは苦笑しつつ答える。

「‥‥とにかく、あのまま放っておくとろくな事にならない、ってのだけは分かる。
　あの子のためにも、あの子が救うはずの世界のためにも」
「‥‥」
「だから、ちょっと手荒いかもしれないけど、あたしなりのやり方で、あの子の心を
　解きほぐす。息つく暇もないほどいろいろなことを体験させて、自分で判断できる
　ようにさせる‥‥そのつもりさ」

ミネアは、あの穏やかな微笑みを浮かべた。
「放っておけなかったのね」
「放っておけなかったのはあんたでしょ？　実際声をかけたのは」
「ふふ‥‥そうだったわね」
マーニャも、少し切なそうなな微笑みを浮かべ、言った。
「結局、なんだかんだ言って似た者同士なのかもね、あたしたち」

その時。
とてててててっ‥‥
廊下から、足音が近づいてきた。
「さあ、お姫様のお帰りだ。つづきつづき、と」

＊

がちゃっ。
ドアが開き、そのすき間から、ディルがおずおずと顔を覗かせる。
「おかえりー！　ほら、そんな所でぐずぐずしてないで、入っておいで！」
マーニャに急かされ、部屋の中に入る。

「あ、あの‥‥」
何か聞こうと思ったディルを制するごとく、マーニャはディルに顔を近づけて――初めて出逢った時と同じように――、そして優しく言った。

「ちゃんと、よ〜く洗ったかい？」
「え？ あ、はい‥‥」

「そう‥‥どれどれ？」

マーニャがディルの頬を、人差し指で、ぷにっ、とつつく。
そのまま、指をほんの少し下に滑らせ、引っ込めた。

「ひゃっ！」
ディルが、くすぐったそうに目を細めた。

自分の指をちらっと見て‥‥マーニャは笑顔を浮かべた。

「よし、合格！ 綺麗になったね。じゃあ次だ」
「え？ 次、って‥‥」
「決まってるでしょ？ 顔を洗ったら、次はオ・シャ・レ！ 洋服を選んであげる」
マーニャが、にやり、と笑った。

「でも私、オシャレって全然したことなくて‥‥洋服ってあんまり分からないし‥‥」
「ちっちっちっ」
困り顔のディルに、マーニャは、大仰に、人差し指を振って見せた。
「そんなんだからダメなの！ お姉さんに任せなさーい！ ばっちりコーディネートしてあげるから！」
「は、はぁ‥‥」
「よーし、それじゃ、奥の部屋にレッツゴー！」
「きゃっ!?」
マーニャは、再びディルの手を取ると、奥の部屋に小走りに駆けていった。

一人残されたミネアが、誰に言うともなく、呟いた。
「実は、自分が楽しんでるだけだったりして」

＊

マーニャとミネアの姉妹は、この宿屋で一番大きな部屋‥‥二部屋が続きになった部屋を借りていた。
普段暮らすのはもっぱら手前の部屋。そして、奥の部屋はもっぱら‥‥

「うわぁ‥‥」
部屋に入った瞬間、ディルが思わず声をあげた。
前と左右、部屋の三面が全て、ハンガースタンドにかかった衣服で占領されていたからである。

「これ、全部‥‥マーニャさんの？」
「さすがに全部じゃないけどね、ほとんどはあたしの。商売柄、どうしても増えちゃうわけ」
「商売柄？」
「あ、言ってなかったっけ。‥‥ミネアからも聞いてない？」
「ええ」
「‥‥ったく、そのぐらい説明しておいてよね、あの子も‥‥」
マーニャは、ちょっと悪態をついた。
「踊り子（ダンサー）やってるんよ、あたし」
目の前のハンガースタンドから服を次々と取りながら、マーニャは言った。
「この服のほとんどが、仕事のための衣装なわけ」

「そうだったんですか」
ディルは、納得が行ったような表情をした。
「そゆこと。ついでに、普段こんなカッコしてるのも商売柄。分かった？」

それを聞いて、ディルは、思いがけないことを言った。

「あ、あの‥‥ご、ごめんなさいっ！」
「ん？　どしたの？」
「あの、あの‥‥その格好、趣味だと思ってました」

がくっ！
マーニャは、派手に腰砕けた。

「趣味って‥‥あたしゃ露出狂（エキシビジョニスト）かい。変態さん（マニアック）かい‥‥」

脱力しきった顔で、ディルに言う。
「いいかいディル。それは大〜〜っきな誤解。他の人の前で言うんじゃないよ」
「は、はい、すみません」

くすっ、という笑い声が、部屋の外から聞こえたような気がしたが、マーニャは敢えて無視した。

＊

「さて、とりあえずこんなところかな」
マーニャは、ディルの体と、両手に抱えた服を何度も見比べた。
「どれがいいかねぇ‥‥」
などと言いつつ、あれこれと、服をディルの胸の前に合わせる。

「この色も、この色も‥‥うーん、こんなのもいいな〜」
楽しくてしかたがない、といった様子で、ディルに服を合わせ続けるマーニャ。
「こんなのも捨てがたいよな〜‥‥」
「あ、あのぉ‥‥」
と、ディルが声をかけるのと同時に、マーニャが声をあげた。
「よおし、これでいくか！」

「え‥‥」
「お待たせ」
両手に２着ずつ、計４着の服を持ったマーニャが、微笑みながら、ディルの前に立っていた。

「ほら、こんな感じでどうだい？」
そう言って、マーニャは、服をディルの目の前に差し出した。
「あんたから見て右から、白いの、黄色いの、緑、ワインレッド。全部無難なワンピースにしといたから‥‥どれも似合うはずだよ」
笑顔で言う。

４着の服を受け取り、戸惑うディル。
「でも、４着も‥‥」
「ここからは、あんたが自分で選ぶんだ」
マーニャが、ぴしゃりと言う。

「自分の服なんだ。最後は自分のセンスで選ばないと何にもならないよ」
「でも‥‥」
「大丈夫だって」
マーニャは、ディルの両肩に手を置いた。
「その日の自分の気分に一番合った服、自分が一番着たい服を、素直に選ぶ。それ
　だけでいいんだから‥‥気楽に、楽しんで選びなさい」
「は、はい‥‥」

「じゃ、あたし向こうにいるから、選び終わったら呼んでね〜」
そう言い残すと、マーニャは、さっさと部屋を出てしまった。

＊

一人残されたディル。

姿見に、自分の全身を映す。
不安そうな顔をしたな少女が、映っていた。

「‥‥」

背負った剣の鞘（シース）を下ろし、着けたままだった革の鎧（レザーアーマー）を外す。
一気に、肩が軽くなった。

水色のレオタードのようなインナーを脱ぎ、一糸まとわぬ姿になる。
もう一度、姿見を見た。
お世辞にもグラマラスとは言えない、華奢な身体が、そこにあった。

「‥‥」

両手で、小振りな胸を覆う。
すっぽりと、掌の中に収まった。

「どうすれば、あんなプロポーションになれるのかな‥‥」

一言呟いて、「ふぅ‥‥」と溜め息をつき‥‥
ディルは、ワンピースの一着を手に取った。

＊

「ずいぶん、悩んでるねぇ」
隣室のマーニャである。
「様子、見てみる？」
「いいよいいよ。これも修行、ってね‥‥もうちょい待ってみよ」

そんな話をしていたところに‥‥部屋の入り口に、ディルが顔を出した。
「あの‥‥選びました」
ディルが出したのは顔だけだった。身体は、入り口の横に隠していた。

「どれどれ？」
マーニャが奥の部屋の入り口の前に立ち、横を覗き込む。

「おー！」
マーニャが予想外の歓声を上げた。
「驚いたー！　予想以上だよ！」
「そ、そう‥‥ですか？」
ディルが、不安そうな口調で言った。
「お姉さん、完全にやられたよ！‥‥ほら、そんなとこにいないで、ミネアにも見せてあげな！」
ディルの手を引き、その体全体を、入り口まで引っぱり出す。

「わあ‥‥」
ミネアも声を上げた。
「可愛いじゃない。すごく似合うわ」

妖精。
そんな言葉がぴったりの、出で立ちだった。

ディルが選んだのは、白のワンピース。
肩のところが紐になっている、袖なしの服だ。
裾のフリルに、青のラインが入っている。

もともと、清潔で清楚なデザインのワンピースである。

それを、小柄で華奢なディルが着たことにより、清楚さがいや増し、ノースリーブの軽やかさ、裾のフリルの華やかさも強調され‥‥
そして、「妖精」が現出したのである。

「なるほどなー‥‥こういう手があったか‥‥」
マーニャが、難しい顔で腕を組み、うんうんとうなずく。
「逆に、姉さんみたいな体形だと似合わないのよね、こういう服」
「いや、正直、あたしの持ってる服の中では一二を争う『似合わない服』だったんだけどね」

そんなやりとりを、あいかわらず不安そうな表情で聞いているディルに、マーニャが言った。
「何て顔してんのよ‥‥あたしとミネアのお墨付きなんだから、もっと自信持ちなさいよ！ 」
「でも‥‥」
「自信ない？」
「‥‥」

マーニャは、少しだけ考え込むと、ちょっと意地悪そうな笑顔を見せた。
「ね、ディルってさ、いつも『あの人みたいになりたい』『この人みたいになりたい』って‥‥そんな事ばかり考えてない？ 例えば、『マーニャさんみたいに胸おっきくなりたい』とか」

「！」
ディルの首から上が、茹でたように真っ赤になった。
それは、まさに先ほど、姿見の前でディルが考えた事に図星を指されたからだった。

「‥‥本当に、分かりやすい子だねぇ」
マーニャは、またディルの目の前まで自分の顔を近づけると、優しい微笑みを浮かべ、言った。
「ディル‥‥もう一回言うよ。この服はね、あんただから似合ったの。あたしなんかじゃ絶対似合わない、この服が」
「‥‥」
「確かに、他の人みたいになりたい、ってのは決して悪い事じゃない。だけど、そのままの自分にだって‥‥それが他の人より劣っていると思っても、実はそれが逆に長所になる事だってある。自分しか持ってないものになる事だってあるんだよ。

あたしの着られないこの服を、最っ高に可愛く着て見せる‥‥それだって、あんたにだけ、出来る事なんじゃないかな？」

「‥‥」
無言のディルに、顔を近づけたまま、マーニャは訊いた。
「自信、出た？」

「自信、って言っていいかどうか分からないけど‥‥なんか、少し楽になりました」
ディルも、やっと話した‥‥そして、少しだけ笑顔を浮かべた。

「よーし、いい答えだ！」
マーニャが、ディルの頭を、くしゃくしゃっ、と撫でた。
「そうそう、そうやって少しずつ『自分だけのもの』を見つけていけばいいんだよ」

＊

「じゃあ、服も決まったし‥‥ここからは大人のオシャレ。お化粧（メイク）を教えてあげるよ。興味あるでしょ？」
「え‥‥はい」
ディルの顔が少しほころんだ。
「こればっかりはね、さすがに初心者が一人じゃ難しいから、付きっきりで教えるよ。踊りの数だけ化粧（メイク）を使い分ける踊り子（ダンサー）のマル秘テクニック、全部伝授してあげるからね！」
「あ、ありがとうございます！」
本当に気が楽になったのだろう、ディルは明るく返事をした。
「よし、それじゃもう一回、向こうの部屋へレッツゴー！」

＊

「‥‥また、お留守番なのね」
こちらの部屋に一人取り残されたミネアが、ちょっと拗ねたような口調で言った。
「まだ、だいぶ時間がかかるわね‥‥そういう時は」
占い屋の道具をしまった袋の中から、さらに小さな袋を‥‥そしてその中から、束になったカードを取り出す。

タロットだった。

占い師（フォーチュンテラー）ならば必ず精通していなければならない、神秘の紙札（カード）。

ミネアは、紙札（カード）の中から、「大秘札（メジャーアルカナ）」と呼ばれる、22 枚の絵札を選び出した。
全 78 枚中、この 22 枚だけを使い、簡単な占いをするつもりなのだ。
「これはこれで、私にしか出来ない事‥‥ですものね」

ミネアの占おうとしていたことはただひとつ。＜勇者＞ディルの行く末である。
心の中に、占うべき対象‥‥ディルの姿を思い浮かべ、ゆっくりと、紙札（カード）を裏向きにテーブルに広げ、混ぜてゆく。
その中から、５枚を無造作に選び出したミネアは、それを裏返しのまま、横に並べて置いた。

紙札（カード）４枚を使った伝統的な占いの技法に、彼女独自のアレンジを加えてつくりあげた、オリジナルの手法。
アレンジ前の技法が「四つの神託（フォー・オラクル）」という名前だったので、ミネアはこの技法のことを素直に「五つの神託（ファイヴ・オラクル）」と呼んでいた。
占いの技法を勝手にいじるなど言語道断、と、うるさい向きならそう怒るかもしれないが‥‥現実問題として、この手法が良く当たるのだからしかたがない。

ミネアは、その中から、一番左の紙札（カード）を、そっと表に返した‥‥。

＊

奥の部屋の入り口脇に置かれている鏡台（ドレッサー）が、２人の顔を映していた。
まん中にいるのはディル。その右後ろに映っているのが、マーニャである。

「まず、全体の下地を作るんだ。ファンデーションを‥‥今日は白い服だから
明るめのがいいね。これをスポンジにとって‥‥そうそう。それを薄〜く、
ムラにならないように‥‥そう、そんな感じでのばしていくんだ」
「はい」

＊

「遠い過去‥‥『死神（デス）』の正位置（アップライト）‥‥」
１枚目の紙札（カード）の意味するところ、そしてその紙札（カード）の名を、ミネアは口に出した。
ミネアの目の前には、黒いフードをかぶった無気味な髑髏の描かれた紙札（カード）が、正しく彼

女のほうを向いて置かれていたのである。
「破滅、絶望、死別‥‥」
神の目が見通したディルの過去が‥‥ミネアの手を借り、紙札(カード)に映し出される。

「本当に、大変なことがあったのね‥‥」

＊

「いいかい、一口にアイシャドウって言っても、ひとつの色を載せておしまい、じゃないんだ。まずベースの色を載せて、それから少しずつグラデーションに‥‥」

まぶたに、淡い緑色が重なって行く。
変わって行く自分の姿に、そして化粧品の匂いに‥‥ディルは胸をときめかせていた。

＊

「近い過去‥‥『隠者(ハーミット)』の逆位置(リバース)‥‥」
２枚目の紙札(カード)を開き、ミネアは呟いた。
「社会からの孤立、自閉的傾向、か‥‥」

出逢った時のディルの泣き顔を、ミネアは思い出していた。

＊

忙しく手を動かしながら、マーニャはディルに尋ねた。

「どう？ 少しずつ、自分が変わっていくのを見てる気分は」
「なんだか、信じられません‥‥」
「いいねえいいねえ、反応がいちいち初々しくて、お姉さんは嬉しいよ」

柄にもなく、オヤジくさい事をマーニャは言った。

「最初はみんなそう。じきにあんたも、これぐらいは自分で自由自在に出来るようになる‥‥それからさ。この『お化粧(メイク)』の面白さと怖さが分かってくるのは」
「面白さと‥‥怖さ？」
「そう。まぁ、じきに分かるさ」

「‥‥」

＊

「現在‥‥『運命の車輪(ホイール・オヴ・フォーチュン)』の正位置(アップライト)‥‥」
３枚目の紙札(カード)を開いたミネアの顔が、明るく輝いた。
「運命の出逢い‥‥幸運の訪れ‥‥」
そして、一言。
「幸運の使者だったりして、私たち」

＊

「口紅(ルージュ)っていうと、こう、出して直接塗るイメージがあるけど‥‥」
「違うんですか？」
「まぁ、あたしなんかも、時間がない時は手を抜くこともあるけどさ。本当は、まず
　ペンシルで輪郭をとって、その内側に、ブラシに取った口紅を塗っていくんだ。ほら」

マーニャの手で、ディルの唇が、キュートなピンク色に染まって行く。

「この上に、つや(グ)出し(ロス)をちょいと載せて、と‥‥」

＊

「！」
４枚目、「近い未来」を表す紙札(カード)を表に返した瞬間、ミネアの表情が凍りついた。
「この紙札(カード)は‥‥」

＊

「最後にひと刷毛、明るいチークを載せて‥‥」
マーニャの持ったフェイスブラシが、ディルの両頬を交互に撫でる。

「じゃじゃ～ん！完成！」
明るく言ったマーニャが、後ろからディルの両肩に手を乗せた。
「どうだい！　これは冗談抜きで自信作だよ！」

「なんだか‥‥自分じゃないみたい‥‥」

うっとりと、ディルが呟く。

本当に、見違えた、という表現がぴったりだった。
つい数時間前まで泣きはらしていた目が、今はそんなことは微塵も感じられない、ぱっちりと魅力的な瞳に変わっている。
埃っぽかった顔も、透明感のある白い肌に。
唇は艶やかな明るいピンク色。
そして、そのようなポイントを押さえながら、全体としては、白のワンピースの清楚なイメージを崩す事のない、決して派手ではないメイク。
これこそが、マーニャの腕前であった。

「なんか、すごく、変わっちゃって‥‥」
「これがお化粧（メイク）の力なのさ。女の顔を、そしてその心まで自由に変える事ができる‥‥
まさに『誰でも使える魔法』だよ」
「‥‥」
ディルは、鏡の中の「自分」に見入っている。

「これは『明るい気持ち』と、その服に合う『清楚』を両方合わせたメイク。そう、
ほら、なんだか明るい気分になってきたでしょ？」
「はい‥‥なんだか」
「さっきよりもっと自信出た？　今度は隠れたりしないで、ミネアにも堂々と見せて
あげられる？」
「はい！」
明るい返事だった。
「よし、じゃあ、一足先に向こうの部屋に行って待っといで。あたしもすぐ行くよ」

＊

「ミーネアさん♪」
ディルが手前の部屋に出た時、ミネアは５枚目の紙札（カード）を裏返したところだった。
安堵の表情。

「何してるんですか？」
たったったっ、と、軽やかな足取りでミネアの目の前に立つと、しゃがみ込む。

「あらディル、お化粧終わったのね‥‥すごく素敵に仕上がってるわ」

ミネアは、例のとろけるような微笑みを浮かべ、言った。
タロットを手早く片づける。

ミネアが実はディルの問いに答えていない事に、ディルは気がつかなかった。

「じゃ、出かける用意が出来たのね」
「いえ‥‥マーニャさんが、すぐ行くから待ってろ、って」

そんな話をしていた時に、マーニャが奥の部屋から出てきた。

「あったあった、ずいぶん奥にしまい込んでたもんだ‥‥ディル、こっちおいで」

駆け寄ったディルのワンピースの左胸に、マーニャは、手に隠し持った物を、ピンで留めた。
「マーニャさん、これ‥‥」

それは、蝶だった。
青くきらきらと輝く、蝶の形をしたブローチ。

「あたしたちが住んでたモンバーバラの工芸品‥‥青水晶の粉を銅の板の上に塗って、
　高い温度で焼いたものさ。綺麗だろ？」
「はい‥‥すごく綺麗ですね‥‥」
「あげるよ」
「え？　本当ですか!?」
ディルの顔が、ぱっと明るく輝いた。
「ホントだよ。少しだけ大人の世界を覗いたお祝い‥‥あたしからのほんの気持ち」
マーニャも微笑みで応えた。
「あ、ありがとうございますっ！」

「じゃ、本当に最後の仕上げ。ちょっとだけスカートを持ち上げてごらん」
「？」
スカートをつまんで、裾を少し引き上げる。
現われたその足首に、マーニャが何かをひと吹き、しゅっ、と吹きかける。

「!?」
「よーし、これで準備万端、と」

いたずらっぽく笑うマーニャ。ディルがその真意を測りかねていると‥‥ふと、ほのかに、いい香りがしてきた事に気がついた。
（この香りは‥‥カジノでマーニャさんと初めて会った時に‥‥）

「お、その顔は気がついたな。そう、これ」
マーニャが持っていたのは、霧吹き器（アトマイザー）のついた小さな瓶だった。

「‥‥香水？」
「そゆこと」
マーニャは、同じ香水を自分の左手首に少量吹きかけた。右手首とこすり合わせ、香りをなじませる。
「へへ。あたしとおそろ♪」
軽くウインクする。

「‥‥あっ‥‥」
軽い驚きとともに、ディルの喜びが爆発した。
「マーニャさんとおそろ‥‥マーニャさんとおそろだー！」
「嬉しい？」
「嬉しいです！」

「ふふっ‥‥」
ミネアも、いつもの微笑みで、そんな二人を見ていた。が、ふいに、真剣な表情になると、マーニャに目くばせした。
「‥‥」
こくり。
マーニャもうなずく。

「よーし、じゃあ出かけるか！‥‥の前にディル、お手洗い行っといで」
「え？」
「酒場のお手洗い‥‥男女兼用かもしれないよ」
それを想像したディルは‥‥一瞬、苦い薬でも飲んだような顔をした。
「‥‥行ってきます」
「終わったら、先に玄関で待ってて」
「はーい」

たったった‥‥と、元気にディルが駆けて行く。

それを見届けて、マーニャはミネアに訊いた。
「‥‥何？」
「さっき、あの子の行く末を占ってたの。４番目、『すぐ先の未来』の暗示に出てきたのが、これ」
そう言って、ミネアは紙札（カード）を一枚、差し出した。マーニャが、その文字を読む。

「『塔（タワー）』‥‥？」

紙札（カード）には、落雷を受けて崩れ落ちるレンガの塔が描かれていた。

「そう。『塔（タワー）』。その暗示は『旅の中止』『突発的なトラブル』‥‥」

マーニャも、はっとした表情をする。
「『すぐ先の未来』って言ったね。それじゃあ、もしかしたら、酒場で‥‥」
「可能性は高いと思うわ」
ミネアは、真剣な表情を崩さず、言った。
「どうする？ 行くのをやめる？」

ぷっ、と、マーニャが吹き出した。
「何言ってんのよ、あたしがそれを聞いてやめると思う？」
ミネアもつられて苦笑する。
「思わないわ」
「でしょ？」
マーニャが笑顔で言う。
「あの子に降りかかる災難なら、あの子が何とかする！ それでもどうにもならなかったら、あたしたちが何とかする！ それでいいじゃん」

「私、姉さんのその無敵の思考パターン、大好きよ」
「イヤミ？」
「ふふ、ちょっと妬いてるだけ」

「よし、そんじゃあ‥‥行くか！ ディルが待ってる」
「‥‥そうね」

＊

こうして、姉妹は、馴染みの部屋を後にした。

彼女達にとって、＜導かれし者＞としての、旅の第一歩であった‥‥。

（つづく）

＜次回予告＞

酒場で出逢いの祝杯を上げるディルたち三人。
そこで、マーニャとミネアは、自らの悲しい過去を、ディルに語るのだった。
そして、ディルもまた‥‥

ディルは、果たして、自らに課せられた運命を受け入れられるのか？

「私の中の炎」第３話　「本当に、つらかったんだね‥‥」

‥‥三人の心が今、静かに、交わろうとしていた‥‥。